

秋は、「○○の秋」と言われるように、様々なことを楽しみやすい季節です。よく耳にする「読書の秋」もその一つでしょう。

中国の漢詩の一節に「灯火親しむべし」とあります。これは、「秋になると、涼しくなり、夜も長くなって、燈火、つまり明かりの下で読書するのに適している」ことを意味します。現代は、昼夜問わず、明かりをともし読書に勤しむことができます。暑くも寒くもなく、過ごしやすい秋は、読書にはもってこいの季節と言えるでしょう。

Sさんの母親は、「音訳」というボランティア活動を長年続けています。これは、目の不自由な人々のために、本や新聞などの活字媒体を声に出して読み上げ、音声にして伝えるという活動です。Sさんも子供の頃、ボランティアの現場に同伴し、母親が音訳をする姿を間近で見ました。

当時は、ICレコーダーなどなく、カセットテープに音声を録音しました。Sさんの母親は、一つの章を何回かに分けて、何度も録音し直していました。Sさんも母親に薦められて、絵本を朗読して、録音したことがあります。ラジカセから再生された自分の声を聞いたおかしさは、今でも母と過ごした思い出となっています。

今日では、活字媒体の音訳サービスとして、オーディオブックがあり、「聴く読書」として一般的になっています。

スマートフォンなどの通信機器では、オーディオブックに対応した様々なアプリがあり、一万点以上の作品を無料で聴けるも



## 自分にあった読書スタイルを 確立し自己を高めよう

のこともあります。ジャンルもビジネス書から子供用図書まで様々で、多様な立場の人が利用しやすいように工夫が施されています。オーディオブックは、スマートフォンやタブレット端末といった様々な媒体で利用することができ、通勤時間の電車内や、車の運転中に両手がふさがっていても利用できます。こうした利便性も相まって、年々利用者は増え、二〇〇万人以上の会員数を有するサービスもあります。

Sさんは、現在もいわゆる紙の本を読むことを趣味としています。同じ本でも、何回か読むうちに理解が深まり、自分の体験と結び付いた時の感動は、読書をする醍醐味となっています。

そんなSさんですが、移動中であっても気軽に、また目が疲れずに聴ける、オーディオブックを使うようになりました。一度読んだ本でも、音声で聴くと新たな発見も生まれます。また、子供の頃の母の「音訳」作業の様子を思い起こすこともあり、故郷に触れる感覚を味わえるのだそうです。

倫理法人会で毎週行なわれる経営者モーニングセミナーでは、『万人幸福の葉』を、ある程度のまとまりで区切って、参加者で交代しながら朗読します。自分が声に出して読むこと、または他の人が読んだ内容(音声)を聞くことで、文章が身体に染み入ってくるような感覚を覚えた経験のある人も多いのではないのでしょうか。

忙しい日々の中で、様々な方法で、書物と触れ合う機会を持ちたいものです。